

大花北遺跡  
小母沢遺跡

2006

長野県富士見町教育委員会

## 例　　言

- 1 本書は、平成17年度に国から国宝・重要文化財等保存整備費補助金の交付を受けて、富士見町教育委員会が行った大花北遺跡（富士見町境7183-1、7183-2）、小母沢遺跡（富士見町落合5772-1、5772-6他）の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は6月28日から10月18日、整理作業は12月2日から翌年3月20日まで行った。
- 3 発掘調査は樋口誠司・小松隆史が担当した。また本書の執筆、編集は樋口誠司が行った。
- 4 本報告にかかわる出土品、諸記録は井戸尻考古館が保管している。
- 5 遺構の番号については、大花北遺跡は14年度調査、小母沢遺跡は16年度の続きを付した。
- 6 調査担当者、発掘および整理作業員は以下のとおりである。
- 7 小母沢遺跡から出土した性格不詳の土製品については、成分分析を長野県立歴史館および埼玉県埋蔵文化財調査事業団に依頼した。

調査担当者　　樋口　誠司　小松　隆史

発掘および作業員　朝香　輝朗　小平　辰夫　小林ノリ子　小林　道子　小林やす子  
佐藤　祐子　平出　文子　武藤きのあ　山中絵里子

## 目　　次

### 例　　言

1 大花北遺跡	1
遺跡の環境と調査の経緯	1
遺構と遺物	3
まとめ	5
2 小母沢遺跡	5
遺跡の環境	5
遺構と遺物	5
小母沢遺跡出土の土製品について	水沢教子 10
小母沢遺跡出土の土製品について	埼玉県埋蔵文化財調査事業団 12

# 1 大花北遺跡

## 遺跡の環境と調査の経緯

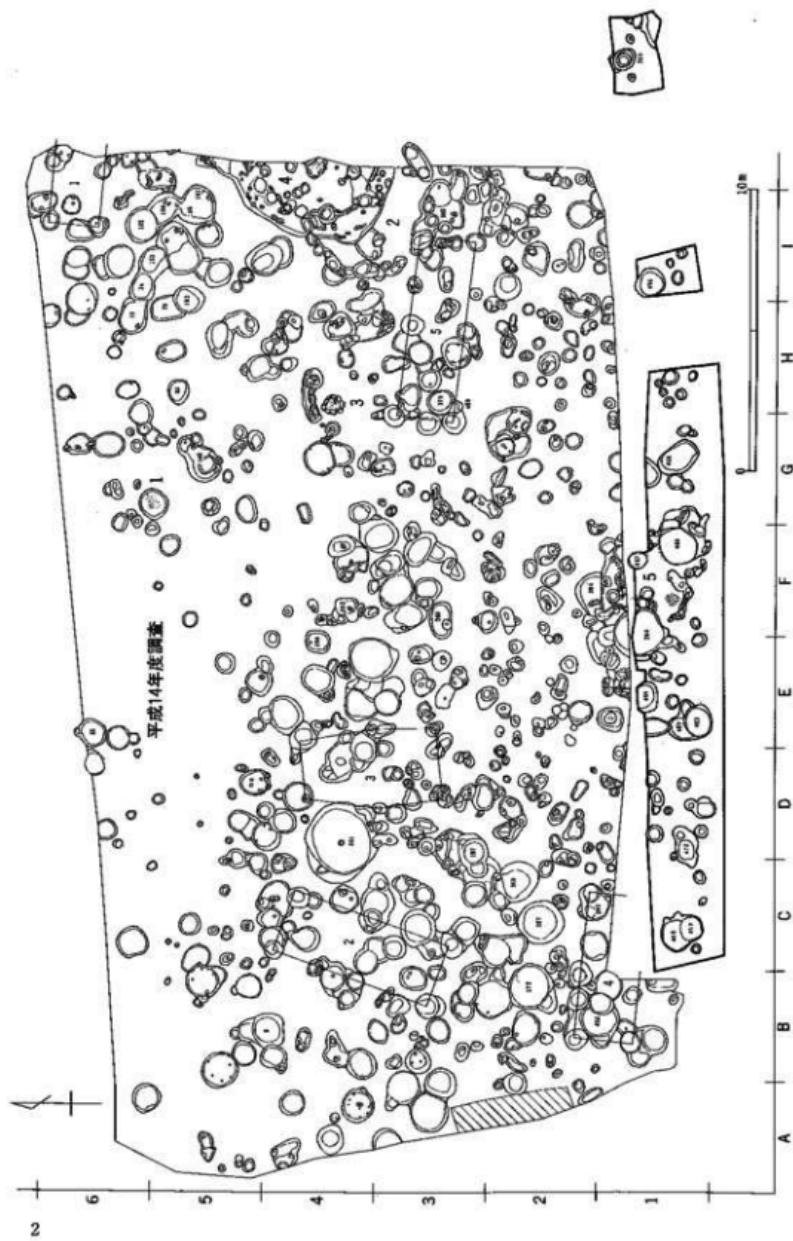
信濃境駅を南東へ少し下った辺りから南に延びる標高906~880mの台地上には、上手から字名にしたがって新田平・大花・曾利の各遺跡が連なっている。総延長はおよそ800mである。大花北遺跡はその中間より上手寄りに位置する。

遺跡はこれまで横道を境にして北側を新田平、南側を大花に分けてきた。しかし平成14年に字名が北側一帯まで及んでいること、多量の耳飾りが出土した後期中葉から後葉の集落とは別な集落が存在することが明らかになってきたことから、調査区一帯を大花北とし、これの北側を新田平と改めた。



第1図 調査遺跡と周辺遺跡分布図 (1 : 25,000)

第2圖 大花北邊緣蜜柑配置圖 (1 : 200)

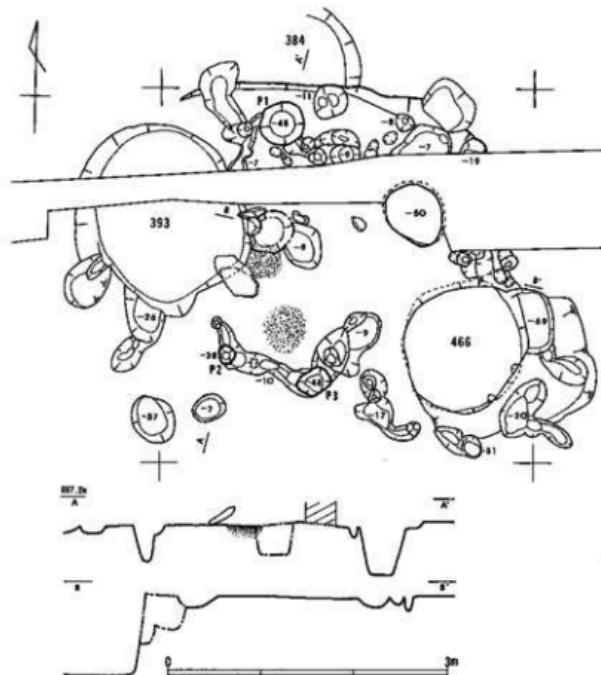


## 遺構と遺物

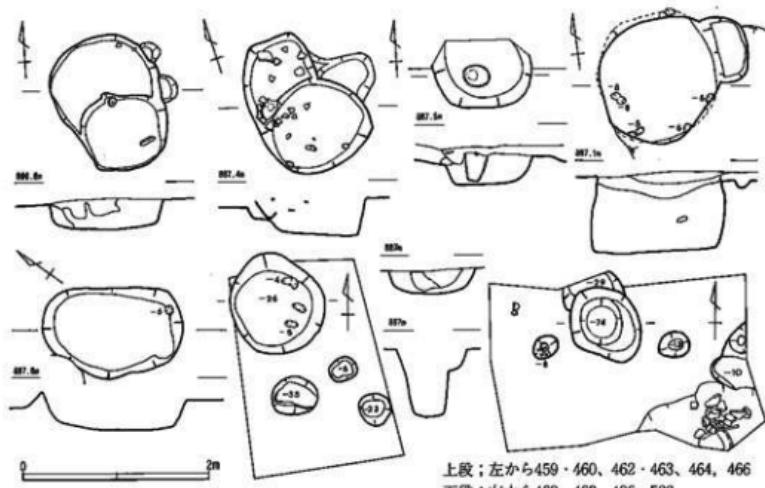
今回の発掘区は平成14年に実施した住宅用地の南側、道路に沿う幅約2.5m、長さ28mほどである。地主の平出芳郎氏から石積みをしたいという話があり、協議の結果、72m<sup>2</sup>を調査することにした。検出した遺構は、中期中葉の住居址1軒、掘立柱建物址1棟、小竪穴15基、柱穴状の小穴などである。

以下、代表的なもののみ記すことにする。

5号住居址 本址は393号と466号の各小竪穴に切られ、384号の落沢期の小竪穴を切っている。床は南側にわずかに低くなっているが、総じて平らである。主柱穴は3箇所で深さ10cm前後の溝でつながっている。炉は393号によって損なわれ、炉石2個が遺されていた。壊れた炉のすぐ南東側には径40cmの焼土址、そこから30cm南には径50cmの焼土址がある。そして東北側の発掘境にある467号とした深さ50cmの貯蔵穴が本址のものである。出入り口は東南の方向と目される。壁は北側にわずかに見られ、最も高い場所で23cmである。



第3図 5号住居址 (1 : 60)



上段；左から459・460、462・463、464、466  
下段；左から468・469、496、500

第4図 小竪穴 (1:60)

出土遺物は少ない。貯蔵穴より藤内期の土器片が出土し、床からは藤内および曾利Ⅰ期の破片が両手分ほど出土したのみである。

393号小竪穴 14年度に北側を調査している。5号址を切っている。壁は全周凹凸があり、床は平らで堅くしまっている。中からはホルンフェルス製の石鋸、黒曜石の剥片のほかに藤内、曾利Ⅰ期の土器片が両手一杯分出土した。貯蔵穴であろう。

459・460号小竪穴 遺構確認の段階では2基が重複していると判断できなかった。459号からは曾利Ⅳ・V期の土器片のほか、北側の底近くから凹石が、東南側から棒状器が出土した。460号からは曾利Ⅳ期の土器片が出土した。両方とも底面は堅くしまっている。墓壙であろう。

462・463号小竪穴 2基が重複している。462号が新しい。462号には曾利Ⅳ期の深鉢の脛部より下半が立っていた。また同一個体の破片が、穴全体に散っていた。463号からは安山岩製の細長い棒状の凹石と黒曜石の剥片が出土した。いずれも底面は堅くしまっている。墓壙と目される。

464号小竪穴 曾利Ⅴ期の深鉢が少し東に傾いて正位で立っていた。土器の上部中央には、藤玉ほどの安山岩の小礫がのっていた。穴の底面はやわらかい。

466号小竪穴 5号住居址と重複している。東側以外は内溝し、巾着形をなす。底は平らで堅くしまっている。立ち上がりの角には、小穴が7箇所ある。穴からは藤内、曾利Ⅰ期の土器片が出土した。貯蔵穴であろう。

468・469号小竪穴 遺構確認の時に不整の円形であったことから、連番を付した。しかし土層の観

察からは単一の穴であることがわかった。出土した土器片はいずれも小さく時期の判別は難しい。底面は堅くしまっている。

496号小豎穴 径110cmの円形を呈する。底には小穴が3箇所あり、少し凸凹するが堅くしまっている。墓壙だろう。

500号小豎穴 堀立柱建物址の柱穴と思われる。東南側は19cmほどの段になっている。後期初頭の土器片が出土した。北側には別の深い穴が続いている。この穴の手前には東西のそれぞれに小穴がある。ここから東南へ1mのところには今日利用している汐があり、その一部にかかった。4号建物址（平成14年度調査）も、同様の規模の柱穴を有していた。

### まとめ

平成14年度に調査した地区では、広場を囲むように墓壙が巡り、墓壙からは、翡翠の飾り玉が出土している。これらは中央墓群と考えられる。さらにその外側にも中央ほど密ではないが、墓と目される小豎穴が同心円状に確認されている。今回の調査区で検出した小豎穴は、その外周の墓の続きであることが判明した。しかし穴からは翡翠などの副葬品は確認されなかった。

ところでこうしたあり方で注目されるのは、昭和61年に調査した居平遺跡（中期末葉）の環状集落である。やはり広場を囲む中央墓群とそれをとり巻く外周の墓群からなり、中央の墓穴からは6個の翡翠の飾り玉が見つかったが、外周の墓穴からは出土しなかったのである。大花北遺跡では、末葉の住居址は1号としたもの1軒だけであり、居平遺跡のように環状に巡っているという確証は今のところない。周辺の調査の成果を待って検討したい。

## 2 小母沢遺跡

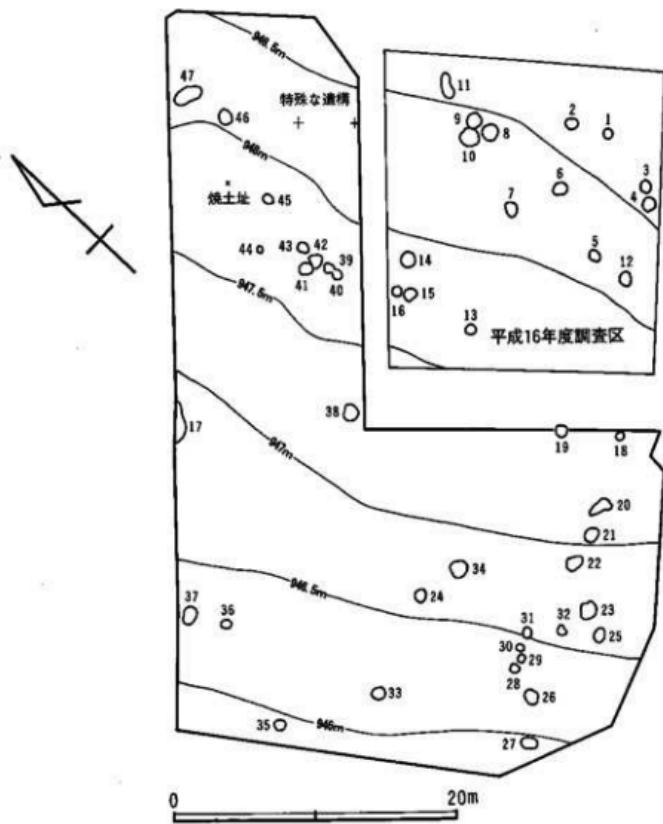
### 遺跡の環境

遺跡は母沢川と小母沢川に挟まれた痩せ尾根上にある。尾根の下手には中尾遺跡が、母沢川を挟んで北側に机原三本松遺跡が、そのさらに北側に机原遺跡が比較的狭い範囲に集中している。前期中葉～中期初頭の集落である。

小母沢遺跡は、平成7年に道路の新設工事（通称オアシス道路）に伴う調査と、平成16年に個人住宅建設に伴い調査を実施している。これらの調査の結果、縄文時代中期中葉の井戸尻期の小規模集落であることがわかっている。

### 遺構と遺物

検出した遺構は、中期中葉の小豎穴31基、焼土址1基と性格不詳の特殊遺構が1箇所である。以



第5図 遺構配置図 (1 : 400)

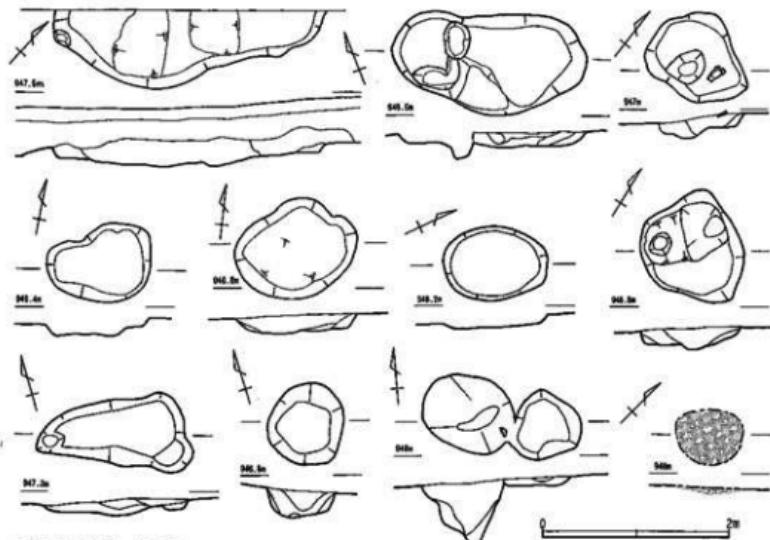
下、主なものについて記すことにする。

17号小竪穴 調査区北側の発掘境にあり、半分ほどは調査区外に延びている。当初は輪郭が大きく住居と思われたが、調査の結果、底面は凸凹していて堅くなく、柱穴や周溝は確認されなかった。遺物は断面図をとった壁の北方、穴の外側から後期初頭の土器片が1点出土している。

20号小竪穴 浅く長細い穴。底は平ら。中期の土器片が1点出土した。

22号小竪穴 穴の上面、やや南に寄ったところに周囲を打ち欠いた平たい安山岩が置かれていた。底はよくしまっている。

23号小竪穴 不整の円形で、底は凸凹している。南西側は他よりさらに深く凹んでいる。底は堅く



上段；左から17、47、22  
中段；左から37、23、46、24  
下段；左から20、33、41・42、焼土址

第6図 小堅穴および焼土址 (1:60)

しまっている。

**24号小堅穴** 北側には柱穴状の小穴が2個ある。底面はよくしまっている。

**33号小堅穴** ボール状を呈する。底は平らでよくしまっている。墓穴と思われる。

**37号小堅穴** 不整の円形で、底は凸凹していて、堅くない。

**41・42号小堅穴** 41号は底が尖る柱穴状の穴。42号との間には、拳より一回り小さな粘板岩ホルンフェルス製の小砾が置かれていた。42号は浅い盤状を呈する。底は凸凹していて、しまっていない。

**46号小堅穴** 卵形の整った穴。底は堅くしまっている。

**47号小堅穴** 東西に長い不整の円形を呈する。底は堅くなく、溝状に掘り込んでいる箇所がある。  
堆土の上層より黒曜石の剥片が1点出土した。

**焼土址** 大きさは長さ74cm、幅60cm。褐色土の面で6cmの深さまで赤褐色に焼けている。北東側が強く焼けていて赤みが強い。周辺1.5mの範囲には炭が散っている。

**特殊な遺構** 重機による表土除去作業を終えてから遺構を検出するため、北側から少しづつ動土で精査を始めた。間もなく、褐色土の下層、ロームとの境辺りでわずかに黒みがかったロームが径10cmの円形に確認された。少し下げるとき、その外周にちょうど竹を輪切りにしたように、土器に似た



第7図 特殊な遺構 (1:30)

ものが現れ出た。土器の可能性も考慮しつつ掘り下げる、北方に2個、さらにそこから西方に4個検出した。南側に移って精査すると、それまでとは違う、容器状をなさない、複雑な稜を有するものが現れた。これらは南北をあけて「コ」の字形に分布している。

土層については、容器状を呈している箇所と38の断面などを観察したが、容器状の中にあるロームと下部のロームはどう見ても同じであり、分層することはできなかった。

2~4、6、7は容器状を呈し、1、9、10、41、69などは板状で、土器のような済曲を有しているものもある。厚さは2~6mmと総じて薄い。8は皮革が焼けて縮んだような凹凸と、気泡のような膨れが見られる。もっとも変わっているのは38で、複雑な稜を有し、器とはとうてい無縫と思われるような形状を呈していた。西側ではローム中に25cmも深く入っている。64も同様に25cmほどローム中に入り、69は周辺と比べて10cmほど深い場所から検出された。そして不思議なことに、なぜか破片の縁はローム化して不鮮明となっている。こうした例は他にも見られた。またこれらには、土器に見られる文様や整形痕、混和材の砂それに煤やお焦げなどは観察されず、堅綿で焼きしまったものはなかった。

これらが何らかの生活跡であれば、関連する遺物が存在する可能性があることから、2m四方の調査枠を西側へ21箇所設定し掘り下げたが、何も出土しなかった。

そこで、急遽、8月13日に近隣市町村の埋蔵文化財担当者、県文化財保護審議会委員の樋口昇一氏に現地を見ていただく機会を設けた。

見たことがない、わからない、土器ではないようだというのが大方の意見であり、炭の分布状況を調査することを勧められ、科学的な分析が必要ではないかとも助言をいただいた。後日、炭の分布調査を実施し、6、7、38については資料の採取を行った。そして切り取りの可能なものについては、薬剤で処置したのちに持ち帰った。

いったいこれらは何なのだろう。人工物とすれば、ロームの降灰が終息する頃を当てるのが妥当であろう。土器とすれば、早期または草創期に相当すると思われる。しかし、先の見学会では早期または草創期の土器とは思えないという意見が出された。確かに容器状を呈しているものの、いわゆる土器の諸特徴が観察されなかったことから、判断を下すには不十分といわざるを得ない。

土器以外の人工物とすれば、予め掘った凹みに粘土やロームを練って塗りかためた可能性なども考えられよう。例えば、穿つことで死者の再生を祈願するという、凹穴がやたらにあいた盃<sup>はい</sup>状穴<sup>じょうけつ</sup>と称する石があるが、粘土などを用いて大地に同じような凹穴を施した施設としても別に不思議はない。

いっぽう人工物でないとすると、成因にはどのようなものがあるのだろう。現段階では想像が及ばない。



第8図 特殊な遺構（北側から）

## 小母沢遺跡出土の土製品について

### —偏光顕微鏡観察中間所見—

長野県立歴史館 考古資料保存分析班 水沢教子

#### ◎ 資料1 土製品No.6 (第9図 写真1・2)

##### 【土器胎土と似た要素】

- ① マトリックス部分と鉱物部分に分かれる。
- ② 0.3mm程度の斜長石や0.07~0.3mm程度の单斜輝石、斜方輝石、微細な黒雲母片や鐵鉱類（赤鐵鉱・磁鐵鉱等）を含む。

##### 【土器と異なる要素】

- ③ クロスニコルで全体がクリアにならず、酸化鉄・水酸化鉄などの褐色の鉄分が凝縮したような様相を呈す。コンデンサーレンズで観察するとさらに赤褐色が濃くなる。
- ④ 通常人為的に素地土を調整したり土器を成形するときに見られる同一方向の細長い空隙（写真3・4）が見られない。
- ⑤ 焼いた粘土塊や繩文・弥生時代の土器に見られる微細（第9図 写真5）な石英・長石片（通常0.02~0.05程度）よりさらに微細（0.025mm未満）な有色・無色鉱物が、マトリックス部分にまんべんなく見られる。古代の土師器の壺（第9図 写真6・7）にも、個体によっては微細なマトリックスがあるが、管見の限りでは小母沢例よりいずれも鉱物のサイズが大きい。

#### ◎ 資料2 土製品No.7

資料1と同様な傾向があるが、0.1~0.6mmレベルの鉱物を含まない。

#### ◎ 資料3 土製品No.38

資料1と同様な傾向がある。0.6mm程度の黒雲母が目立つ。

以上のように、土器胎土と似た要素もあるが、かけ離れた要素が大きく、褐鐵鉱の凝縮体である可能性が高い。ただ、外見的には土器のように見えるが褐鐵鉱破片と結論づけられた下茂内遺跡出土No.2資料（岡村2005）と比較すると若干の違いがある（第9図 写真8・9）。下茂内例は⑤がほとんど見られず、0.1~0.6mmレベルの岩石・鉱物のみを膠結した堆積性褐鐵鉱であるのに対し、小母沢例は⑤が見られることから土もしくは粘土に褐鐵鉱がしみこんだものの、その凝集の度合いが弱かったのではないかと考えられる。

実物の印象は、力をかけず容易に割れることなどから、褐鐵鉱の塊のようなものと予想した。今回のレバラートでもその特徴が見られた。ただ、予想したよりもマトリックスと鉱物の区別が明確で、鉱物は通常の土器に入っているものと同じような光学的特徴を有するため、その成因には興味深いものがある。その大きさは、繩文・弥生土器に比べるとかなり小さく、古代の土師器の特殊

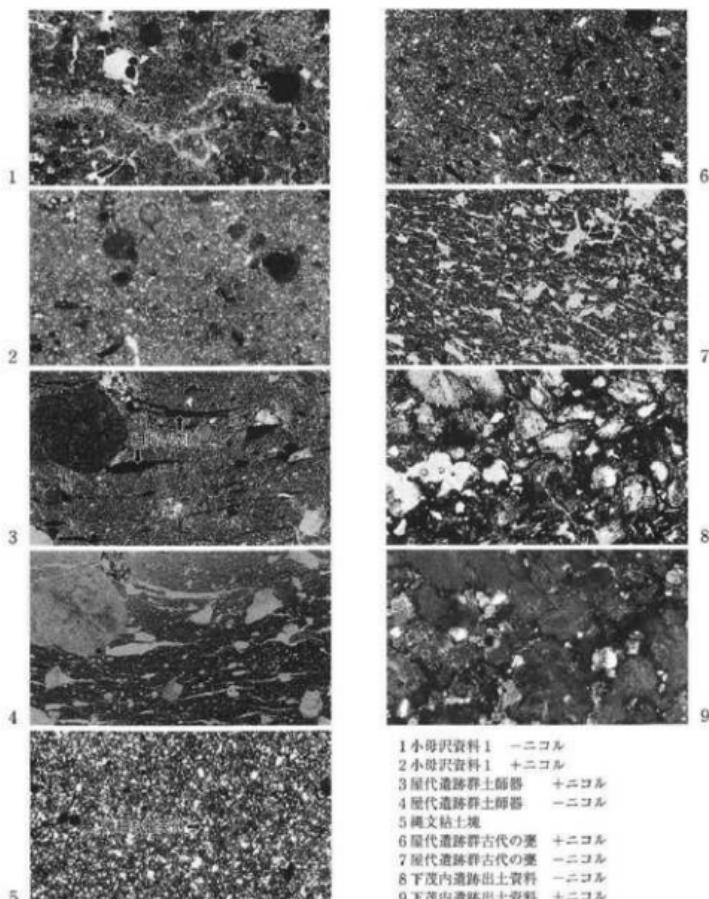
なものよりもさらに小さい。

年度末の時間的な制約から中間的な報告となつたが、さらに小母沢遺跡出土資料と当館所蔵の他のプレバラートとマトリックス部分の比較、SEM-EDS分析による通常の土器のSiO<sub>2</sub>・Fe<sub>2</sub>O<sub>3</sub>濃度との比較を通じて、より科学的な裏付けをしたいと考える。

#### 参考文献

岡村秀雄 2005「下茂内遺跡第Ⅱ文化層出土の『土器』」『長野県立歴史館研究紀要』11

\*使用機器 オリンパス製偏光顕微鏡BR 2、写真撮影装置PR20



第9図 各種の偏光顕微鏡写真

## 小母沢遺跡出土の土製品について

### —理化学的分析に先立つ問題点の整理—

埼玉県埋蔵文化財調査事業団

1 分類 検出した土製品は、①土器のような形状を示し一定のまとまりをもって立位で検出されたものと、②不定形な形状で広がりを示すものに分けられる。

2 特徴 検出した土製品が、土器の可能性があると考えた理由は、発掘時に色調、形状、硬さ等の点から地山のロームとは異なった物質として境界が確認できること、そして本来的な材質は土（粘質土やロームを含む）であると判断できたことの二点である。

3 未焼成土器の可能性 未焼成土器についてはいくらかの検出例が報告されているが、疑問点が多い。未焼成の土器は乾燥を経て風雪に曝されると比較的短時間で形状が失われ、土壤と混ざってしまう。成形直後に乾燥を経ないで埋没したような状況や、本来の焼成前に加熱を受けて生焼けになった場合にのみ遺存する可能性がある。現地で確認した限りでは、小母沢遺跡の土製品には可塑性は見られなかったので、未焼成土器の可能性はない。ただし、生焼けの可能性を消去することはできない。

4 共伴遺物 土製品の周辺からは共伴遺物は確認されなかった。もっとも、検出面は地山のロームであり、他の遺構が検出できない限りは遺物が存在する理由はない。

5 検出状況 土製品は、通常の遺物のように遺構の覆土から検出されたものではない。むしろ旧石器時代の遺物のようにロームの中から、それにはり付くように検出された。最大の特徴は、①と分類したほうでは全体として土器のような形状を示しながら、内面では物体の表面が比較的明瞭であり、外側では地山との境界が不鮮明であった。また下部では表面が不鮮明であり、上部では表面が比較的明瞭であった。同様に②と分類したほうでは、地表側で表面が比較的明瞭であり、地山側では境界が不明瞭であった。

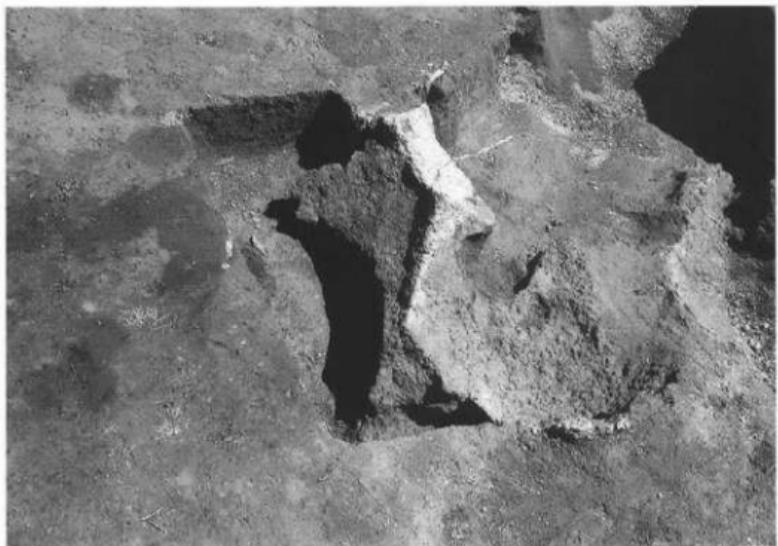
6 被熱痕跡 明確な被熱による赤化は認められず、炭化物粒子の集中も認められなかった。

7 暫定的結論 以上から小母沢遺跡出土の土製品は、土器の素地土を構成するような粘質土そのものではなかったので未焼成土器とは考えられない。また、土製品の外側が地山へと漸次移行するように見える点から、その主たる成分は地山のロームに近いものであろう。ここでは類似した天然物が想定できることから、人為物であるとの前提に立ち、地山と土製品との間に明確な覆土が見出せなかった点を重視し、暫定的な結論として、遺物ではなく遺構の一部と考えられる可能性を指摘しておきたい。

時期は不詳であるが、地山のロームを掘削し、何らかの用途に基づいてその内側に地山のロームを主成分とする材料を一定の厚さで貼り付けたものであり、ごく弱い焼成を加えて表面を硬化させた可能性を想定しておきたい。なお詳細については、胎土分析等によって、土製品と地山土壤との鉱物組成の違いを比較検討した上で再論したい。



第10図 特殊な遺構 No 2 ~ No 6



第11図 特殊な遺構 No38

報告書抄録

ふりがな	おおばなきたいせき・こばあさわいせき						
書名	大花北遺跡・小母沢遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	樋口 誠司						
編集機関	富士見町教育委員会						
所在地	〒399-0214 長野県諏訪郡富士見町10039-4 TEL 0266-62-2400						
発行年月日	西暦 2006年3月20日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村 遺跡番号					
おおばなきた 大花北	ながのけん 長野県 ふじみまち 富士見町 おかい 境	203629	113	35度	138度	20050928 ~ 20051018	72 石積み工事
	ながのけん 長野県 ふじみまち 富士見町 おかい 落合			52分	16分		
				20秒	55秒		
こばあさわ 小母沢	ながのけん 長野県 ふじみまち 富士見町 おかい 落合	203629	88	35度	138度	20050628 ~ 20050903	893 住宅建設
				53分	16分		
				39秒	25秒		
こばあさわ 小母沢	ながのけん 長野県 ふじみまち 富士見町 おかい 落合	203629	88	35度	138度	20050628 ~ 20050903	397 住宅建設
				53分	16分		
				39秒	25秒		
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
大花北	集落	縄文	住居址1軒、小堅穴15基 掘立柱建物址1棟	縄文土器・石器			
小母沢	集落	縄文	小堅穴22基	縄文土器・石器			
小母沢	集落	縄文	小堅穴9基・焼土址1基 特殊遺構1箇所	縄文土器・石器			

---

大花北遺跡  
小母沢遺跡

2006年3月20日

発行 富士見町教育委員会  
印刷 ほおづき書籍  
長野市橋原2133-5  
☎ (026) 244-0235㈹

---